タビダチノコトバ

作　景山　圭祐

［登場人物］
加藤雄介　４４歳　研究開発部員
上村修一　６４歳　研究開発部同僚

［舞台］
株式会社ドリームバーズの研究室。舞台の正面に事務机が2台、奥にはホワイトボード、ホワイトボードの横には棚がある。棚は引き戸が付いたものと付いていないものがある。引き戸が付いていない棚には手提げ金庫とファイル等がある。上村の机の上には鳥の剥製、書籍、書類、加藤の机の上には実験道具、サンプル一式、書類が置いてある。上手に研究室の窓、下手に研究室の入り口がある。入り口付近には組み立てていない段ボールが置いてある。研究室の壁には賞状が飾ってある。

シーン0

暗い舞台
どーん……鈍い音。

シーン1

研究室。上村が座っている。鳥の剥製に話しかける。

上村　タビダチ……おはよう。今日は元気がないぞ？　天気も良いし……最上のおもてなしをしているはずなのに……

上村、机の上に置いてある鳥の剥製を眺め、撫でる。

上村　ねえ、答えてくれよ……

上村、微笑む

上村　キミをみているとすべてが美しく見えるんだ……きれいだよ……ああ……

上村、机のまわりで踊る。

上村　今日も新しい一日が始まる。新しい朝がやってくる！　毎日が新しい！　おお！　最高！　最高！　最高！

上村、ホワイトボードに今日の日にちを書く。

上村　今日も最高だ！

どーん……鈍い音。

上村　またか……（音が聞こえた方向に向かって）生きづらい……よなあ……

上村、何かを思い出す

上村　子供の頃……外で大きな音がなった。出てみると鳥が倒れていた。窓が透明に見えたのだろう……かわいそうにと思ったんだ。助けなければと思って、元気になるまで家で面倒を見た。3か月かなあ、羽をバタバタさせ、出たい！　と言ったんだ。じゃあ、出てみるか……鳥はうんと言った。そして学校の屋上から……俺は言ったんだ……さあ飛ぶんだ！　でも……飛べなかった……かわいそうに、かわいそうに。痛かっただろうに……苦しかっただろうに……だから……声を聞きたい……

上村、悲しそうな表情、上村の机に置いてある鳥の剥製を手

に取り、話しかける。

上村　ねえ……土の上で横たわってるキミを見てそう思ったんだ……キミの名前はタビダチだと……旅立ちたいと思っていたんだろうに……飛び立つことができなかった……俺のせめてもの償いだ……

上村、鳥の剥製を撫でてそっと机に置く。

加藤が研究室に入る。

加藤　（小さな声で）おはようございます……

加藤、椅子に座る。

上村、ずっと鳥の剥製を撫でて見つめている。

加藤に気付く。

上村　おい！

加藤、びっくりする。

上村、怒る。

上村　あいさつしたか？

加藤　……はい。

上村　はあ？　なんだ？　その小さな声は？

加藤　はい。

上村　声が小さい！

加藤　はい。

上村　声が小さい！（加藤の顔をみながら）おーい！　俺の声、聞こえてますか？　聞こえているんですか？

加藤　すみません……何かされていたので悪いなと思って大きな声を出すことが出来なくて……

上村　そんなの関係ないだろう、朝の挨拶は元気良く……おはようございます……だろうが！

加藤　……

上村　おい！

加藤　はい。

上村　お前と話をすると疲れるわ。

加藤、立ったままうつむく。

上村、笑いながら椅子に座り、一人でしゃべる。

上村、独り言を言い始める。

上村　子供の頃の話だ。オヤジは警察官だった。拳銃を服に忍ばせていた。俺は言った。あそこにいる鳥を撃ってくれ……と。いや、鳥は撃てない。なんでそんなものを持っているの？　と聞いた。しばらく気まずい顔をしていたけど、ぼそっと、人を撃つのだ、と言った……

上村、撃つしぐさをする。

上村　人を撃つって？　子供ながら人は人を撃つことができないと思っていたんだ。オヤジが撃てる人間ってどんなやつだ？　人間が生物の中で一番偉い生き物なのに……その中で撃てる人間……

ピストルの音が鳴る。

上村　あ……落ちた。鳥……さっきまで生きていたのに……みんな見てる……生き物ではなく……モノとして……人が集まってくる……見世物……祭りのように……そして表情は変わる。去り際に……嫌だよねと。真っ赤に染まる。土が赤くなりその世界にざわめく……俺はなりたくない……

上村、悲鳴をあげる。

加藤　大丈夫ですか？

上村、怒る。

上村　俺が話をしていたのに、なぜ邪魔をする？
加藤　あの、悲鳴を上げられたので……
上村　悲鳴を上げたら、お前は声をかけるのか？
加藤　悲鳴をあげられたら……やはり心配してしまいます……
上村　お前は鳥が人間に撃たれたらどうする？
加藤　……
上村　おーい！
加藤　……
上村　おーい！　聞こえていますか？　質問していますけど？
加藤　すみません……突然の質問で戸惑っています……
上村　何が？　何がわからない？
加藤　いきなり子供の話をされて、そこから悲鳴……で、鳥が撃たれた話……
上村　おい！　銃で撃たれる……これをどう思うかということだ！
加藤　……

上村、手でピストルの形をつくり、加藤に向けて、

上村　バーン！

加藤、椅子ごと後ろに倒れる。起き上がる。

上村　この世の中は戦いなのだ。ピストルで撃たれて防御できなきゃあ、即死……

上村、笑う。

加藤　……
上村　ねえ、タビダチ……

上村、机に置いてある鳥の剥製を取り、撫でる。
加藤、立ったまま下を向いている。

シーン2

研究室。雨の音。上村の独り言で始まる。上村、落ち込んでいる。
上村、机の上にある鳥の剥製を見て話しかける。

上村　今日は雨だよ……タビダチ……この町は落ち着くだろう？　トウキョウという街はビルが多くって……そうだよね？　住みにくいよね？　病気も多いんだよ。知ってるかい？　でもこの町は動物が病気にならない町だということを……

上村、机にある書類を探し、取り出す。

上村　この論文だよ！　動物は病気にならない。なぜか？　動物は不機嫌にならない、うんざりしたり、憂鬱になったり、苦しむことや悩んだりしない。人間と同じくらい無理を強いられているのにもかかわらず、病気は少ない。あれこれ、考えないからだって……そんなこと、嘘だろうよ。動物たちも考えるだろうよ。苦しんだりしているだろうよ。誰もそんなことわかっていないんだ！

上村、大きな声で

上村　人間の勝手な思い込みだよ！　トウキョウの匂いを持ってるやつが多すぎる……

加藤、研究室に入ってくる。

加藤　おはようございます。

上村、怒る。

上村　おい、うるさい！
加藤　すみません……
上村　俺がせっかく話していたのに……なんで邪魔する？　何回も言っているだろう？　邪魔をするなと！
加藤　この間は声が小さいと言われたので……今日は……
上村　お前はものわかりの悪い人間だなあ！
加藤　……
上村　臨機応変にその場の空気を見て対応しろよ。脳みそ働いていますか？　生きていますか？　大丈夫ですか？
加藤　……
上村　このクソが！

加藤、睨み、席に座る。
上村、笑う。
加藤、仕事を始める。

上村　おい、お前！　吉田の仕事どうなった？
加藤　あの……、まだです。
上村　何やってんだ！
加藤　……

上村、加藤をバカにするように

上村　なんでやっていなかったんですかぁ？
加藤　……
上村　聞こえてないんですか？
加藤　あの、会社が停電で……
上村　停電？
加藤　はい。
上村　電気会社、呼んだんだろう？　直ったんだろう？　すぐやれや！

加藤　呼びましたが、直ってないです。
上村　電気ついてるじゃないか？
加藤　これは予備電源です。あの……お聞きしてよろしいでしょうか……
上村　よし、質問に答えてやろう。
加藤　外の大型処理装置、半年間動かしていないのですが……
上村　はあ？　それが？　何か？
加藤　理由を知りたいのです。何で動かしてないのか……
上村　お前が悪いからだろ？
加藤　それでは理由になってないんです……
上村　だから？
加藤　停電になっているわけです……おそらく原因は大型処理装置が動いていないせいだと思います。
上村　はあ？
加藤　電気会社さん、言われていました。大型処理装置から漏電が起きていて、今回の停電の原因だろうと。配線も複雑だし、復旧も大変だって。
上村　大型処理装置の稼働はお前にすべて任せたはずだ！
加藤　私はその話を聞いていません。しかも一度も処理装置を動かしたことないので。わからないのです。動かしたことがあるのは上村さんだけ。動かす方法も知っているのも上村さんだけ。だから聞いているのです。
上村　俺は半年前に全部お前に任せた！
加藤　すみません。教えていただいてもないし、引き継ぎもしてもらっていません。
上村　引き継ぎというのは雰囲気で引き継ぐものだ。あれこれ教えてもらって引き継ぐなんて誰がやる？　見てみろ。日本の政治家ども。大臣の新旧引き継ぎ式、形式的なモノじゃねえか。俺からお前の引き継ぎも形式的なモノ。何を引き継ぐ？
加藤　操作方法……
上村　お前がやれば？
加藤　上村さんしかわからないのです。

上村、立ち上がり
上村　（国会の予算委員会の雰囲気で）上村修一君。記憶にございません。
上村、座る。
上村　（質問者の雰囲気で）操作方法はわからないのですか？
上村、立ち上がり
上村　上村修一君。記憶にございません……
加藤　……
上村　だからなあ！　記憶にないんだよ！
加藤　それでは困るのです……
上村　困ればいいんじゃないの？
加藤　……わからないと配線から何からすべて変えないといけなくて。助けていただきたいのです。
上村　俺はわかんないんだよ！　わかんなかったら変えてもらえ！　配線すべて！
加藤は呆れ、無視する。加藤、仕事を始める準備をする。
加藤、机の上に置いてあるサンプルが無くなっていることに気付く。
加藤　……あのう。ここにあったサンプル全くなくなっているんですがご存じないですか？
上村、無視。加藤、探してる。
加藤　無い、無い、無い……

加藤、サンプルを探してる。

加藤　あの、知りませんか？
上村　はあ？
加藤　今日、分析測定に使うやつだったんですけど……ご存じないですか？
上村　何のこと？
加藤　山本さんの依頼の分析測定のサンプルなんですけど……
上村　知らないよ。そんなもん。
加藤　そうですか……

加藤、再び探す。

上村　管理が出来てないからだろ。
加藤　自分の名前書いてました。加藤って……この間も同じようなことがあって、今回も……

加藤、上村を見る。

上村　おい！
加藤　はい。
上村　何か疑っているのか？
加藤　いや、そんなことは。
上村　お前だろ？　お前のサンプルをきちんと管理できていないからなくなる。ただそれだけ。
加藤　先日も計測器の羽が壊れてました。粉々になっていました。床に金属の破片が。
上村　お前の置き方が悪いんだろ。
加藤　鍵もかけて戸棚にしまっておいたんですが……
上村　地震が来たんじゃないのか。
加藤　地震ですか……そんなのありましたか……ここ最近？
上村　じゃあ、気のせいではないのか？
加藤　……
上村　それよりこっちの方が先だ……社長から仕事が来てる。これを今日中にやれ。
加藤　すみません。山本さんの依頼もありますし……こんなにできません。
上村　社長からの仕事だ！
加藤　……
上村　この部屋で一番偉いのは誰ですか？
加藤　……
上村　（バカにするように）聞こえないですか？　一番偉いのは誰ですか？
加藤　……
上村　一番偉いのは俺だ！　俺の指示は社長の指示だ。
加藤　……
上村　お前は俺の言うことが聞けないのか。
加藤　そういう意味ではありません。本坂次長がここの上司です……
上村　あのなあ……月に一回来るか来ないかのやつが……上司？
加藤　でも……
上村　でもじゃない……もういい……電話する！　社長に！
加藤　何をですか？
上村　俺に口答えすると……
加藤　やめてください。

加藤、嫌がる。
上村、加藤の姿を見て電話する。

上村　もしもし、社長。加藤がですね……嫌がってるんですよ。この仕事……はい、そうですよね。ちゃんとさせるようにします。はい……ありがとうございます。

上村、電話を切る。

上村　わかっただろ？　やれ！　いますぐやれ！

加藤　電話するなんて……

上村　お前が口答えするからだ。

加藤　……

上村　何をもたもたしてる。すぐやれ！

加藤、不満な顔をしながら仕事を始める。

上村　返事は？

加藤　……

上村　返事は！

加藤　はい。

上村　小さい！　声が！

加藤　はい！

上村　何か文句ある言い方だよね。まあ、返事したから良いか……（独り言のように言う）俺の手柄は俺のモノ。本坂の手柄も俺のモノ。お前の手柄は俺のモノ。俺はお前が助けてくれと言っても協力することはない、だってリスクがあるもん。わかる？

加藤　……

上村　まあ、わからないよな？

加藤　……

上村　じゃあ、よろしくね……

加藤、嫌な顔をする。

上村　なんだ？　その眼は？　良いか？　もう一度言うぞ。この仕事は社長からの命令だ。返事は？

加藤　はい。

上村　返事は？　聞こえない！

加藤　はい。

どーん……鈍い音。

上村　またか……今日も……

上村、笑いながら出ていく。

加藤、机で仕事している。

シーン3

研究室。次の日の朝。上村、歩きながら独り言を言う。

上村　ある日のこと、子供の頃に見た鳥を見ました。きれいな虹のような羽をしていました。俺はその鳥を追いかけました。公園、学校、山、海……すぐそこにいるのに捕まえることができません。おいで……おいで……こっちにおいで。ほら。捕まえた。ここから離さないぞ。ずっと……

どーん……鈍い音。

上村、音がした方へ向かう。

上村　俺には聞こえるんだ……生きたい？　ずっと生きたいんだ？　そうだよね……生きたいよね？　俺も生きていたいんだ！　海で船が沈んで油が流出する。苦しい……飛びたいんだ……羽が油まみれになって飛べないんだ……どうしたらいんだ？　ねえ、助けてよ……神から炎を向けてまかれ、岩に打ち負かされてるんだ……ボクらは死んでしまうよ。そうだよ、俺がキミたちを助けてあげる。

上村、鳥の声が聞こえる方向に向かって

上村　もうイイや……なんか疲れちゃった……生きててもどうせロクなことにならないし……

上村、泣き始め、項垂れる。

上村　何を言ってるんだ！　飛べないって？　なんで？

上村、優しく言い始める。

上村　誰が悪いんだ？　何も言えなくなったんだね。安心して……心配しなくてもいいんだよ。

上村、加藤が座っている席に近づく

上村　大丈夫……

上村、加藤を抱きしめている。

加藤　やめてください。

加藤、嫌がる。

上村　なんでお前を抱きしめているんだ？

加藤　あの、誰と話をしていたんですか？

上村　誰って……お前見えなかったか？　ここに居たんだよ。タビダチが……よかった……タビダチの温かさを感じて。この手に伝わったよなあ……

上村、怒る

上村　幸せだったのに……

加藤、怖がる。

上村　その気分をぶち壊しやがって！

加藤　……

上村　おい、それよりできたか？　仕事？

加藤　（小さな声）あの……ここが……

上村　おい！　まず、俺に対する質問に答えろよ。社長の仕事はできましたか？

加藤　……
上村　おい！

上村、加藤の頭を殴る。

上村　できたのか？
加藤　はい、まだ……
上村　俺なら、30分でできるのに。なぜできない！
加藤　……
上村　なぜ、答えない！
加藤　……
上村　お前は病気なんだ！　病気なんだ！　普通の人が出来ることが出来ないんだよ。
加藤　……
上村　病気の加藤君！　これからお前に質問する。一たす一は？
加藤　……
上村　おい！　答えろよ……
加藤　二ですか……
上村　はい。よくできましたね……じゃあ、四たす四は？　いくらでしょう？
加藤　……
上村　おい！　病気の加藤！　答えろよ！

加藤、睨みつける。

上村　お前は人間じゃないんだよ！　こんなものが一日……しかも徹夜してまでかかるものかということなんだ！　一瞬でできないのがおかしい！　良いか。考えてみろよ。

加藤、じっと睨みつける。

上村　お前、俺に反抗しているのか？　その顔。そのしぐさ。すべてが反抗的なんだよ……
加藤　反抗なんてしていません。
上村　してる。
加藤　してません。

加藤、睨みつける。

上村　何だその目は？　病気の目だ！　病気だって！

上村、加藤のそばに行き、手をとり、

上村　手が震えてる。

上村、加藤の体の一部を触りながら

上村　しかも体重も減ってる。これは病気の兆候ですよ。俺にはわかる！言われたことができない！　たぶんね、脳が受け付けないようになる病気……思考が停止する病気！　これは病気だ！
加藤　……
上村　社長もね、そう言ってる。病院にすぐに行ってこいって！
加藤　元気です……病院に行く必要もありません。
上村　今すぐ病院に行ってこい！　診断書に就業に問題がありませんとない限り仕事をさせない！
加藤　何で言われなきゃいけないんです？
上村　何だその言い方は？　いいか！　お前は病気！　自分自身で気づいてないんだよ！
加藤　病気ではありません！
上村　病気だ！　お前は返事だけは良いんだ。で、結果は何もできていない。病気だよ、病気。診断書！　診断書！　診断書！　ここに診断書を持ってこ

い！　お前には何もさせない。何もやらさない。

加藤　嫌です！

上村　じゃあ、社長に電話する！

加藤　……

上村、微笑む

加藤、項垂れる

上村　わかったよな？　加藤君……いってらっしゃい……

上村、笑う。

加藤、研究室を出る。

シーン4

研究室。上村と加藤が居る。

上村　よかったなあ。仕事が出来るなんて……病気じゃなかったんだね……

加藤　……

上村　診断、間違ってるんじゃない？

加藤　……

上村　どんな人が見ても、直感でお前は病気だ！　と診断する。そんなに検査するかね？　何日もかけて……

加藤　……

上村　最近の医者は大丈夫かねえ……

加藤　……。

上村　俺が医者なら、お前は人間じゃない！　と言ってやる。

上村、笑う。

加藤、睨みつける。

上村　おい、お前、高本の依頼はどうなった？

加藤、上村と目を合わせず、

加藤　やっています！

上村　遅い。そば屋の出前じゃないんだぞ。結果を今日中に出せ。

加藤　でも……

上村　でも？

加藤　無菌試験ですよ、1週間培養して……結果が出るのは明日です。

上村　俺がね、結果を出せ、と言ったらすぐに出す。それがルールだろ？

加藤　できません。

上村　はあ？

加藤（ぶっきらぼうに）試験結果を偽ってもいいんですか？　結果は明日出るんです。で、今日出せ、すぐ出せは無理ですよ。

上村　俺がやれといったらいますぐに……だ！

加藤　それは偽ってでもですか？

上村　偽る？

加藤　偽らないと出ませんよ……

上村　（電子レンジの音を上村が自分で言う）チン！　できました！

加藤　できていません。

上村　できたんだ！

加藤　できていません。

上村　ん？　できていない？　俺が出来たといったんだから、できたんだ！

加藤　……

上村　ルールブックは俺だ！　偽るという言葉はルールブックにない！

加藤　……

上村　俺が無いと言ったら無い！　記憶がない！　といえば記憶がない！　記録がない！　といえば記録がない！　そして存在がない！　といえば存在がないんだよ！

加藤、じっと上村を見る

加藤　何を言っているんですか？

上村　はあ？　聞こえなかったかい？

加藤　恐ろしいことを言っているんですよ。

上村　（笑いながら）はあ？　そんなにお前は正義感があったのか？　お前は完璧な人間か？　すべてが正しいのか？　みんながお前の発言を聞いてそう思ったのか？　怖いよね、怖いよね。自分が正しいと思っているやつ。お前はそんな人間なんだよ。お前は学ばなかったかい？　大同小異という言葉を。世の中で少数意見なんてつぶされるんだよ。

加藤　正しいことを言ってまずいですか？

上村　おお……怖いね。年配者を大切にしなきゃあ。

加藤　……
上村　お前は空気というものを学ばなかったのかい？
加藤　……
上村　大勢でご飯を食べに行く、途中からみんなの視線が自分に向けられる。ここは俺が払わなきゃいけない空気とか……

加藤、じっと睨みつける

上村　わかっていない顔だね……もっとわかりやすい例えを言おうか。子供同士で何人かいる。あいつを無視しようぜとなる。それに従わなきゃあ、自分もそうなるかもしれない……そう思ってそれに従う……
加藤　それとこの話は違います……

上村、加藤の前に立つ

上村　お前、わかっていないなあ。
加藤　何がですか？
上村　お前もやっていたんだよ。この間、社長に対して態度が変だったな。
加藤　（小さな声で）いいえ……
上村　その場で俺に対してはぶっきらぼう、社長に対しては、ゴマをすりやがって……
加藤　……
上村　お前もおれにゴマをすれ！
加藤　……
上村　それが空気なんだ！

加藤、嫌な態度を示す。

上村　やはりお前はわかっていない。俺がＯＫといったらＯＫなんだ。つまり、結果は出てるんだよ、一週間かかる仕事は俺の一声で1日になる。いや1時間、1秒……（笑いながら）何もしなくても結果はでるんだよ。わかったな？　すぐ出せるよね？

加藤、睨みつける。
上村、加藤を見ながら

上村　一生お前はわからないんだよ、ずっと……この先も……

上村、机にある郵便物を加藤に投げつける。

上村　おい！　これ！

加藤、睨みつける。

上村　ちゃんと言っておけよ！　間違って送ってきやがって……お前の郵便物がなんで俺にくるんだ。おかしいだろうが？　このボケっ！

加藤、郵便物を拾う。

加藤　……
上村　迷惑をかけてると思わないか？　俺がこの郵便物を見て、申し訳ないと思わないか？　すぐ電話して訂正させろ！
加藤　……

加藤、電話をかける。

加藤　株式会社ドリームバーズの加藤です。いつもお世話になっております。あの、いただいた請求書なんですが、はい、担当者が上村でなくて、私、加藤ですので、今後は加藤宛に送っていただけると……いや、はい、この間から、そうなんです。そうです。挨拶？　良いですよ、お会いしているので……大丈夫

です。いや、まあ、はい。では、改めて。

加藤、電話を切る。

上村　なんだ？　今の電話？
加藤　（小さな声で）上村さんが請求書の宛先を変えろと言われたので。その電話でした……
上村　はあ？　そんなことを言ってるわけじゃねえんだ！　何分電話で話してんだ？
加藤　……
上村　時間ぐらい測っておけよ。さっきの内容だったら10秒でおわる。3分かかったぞ！　なんでだ？
加藤　（小さな声で）今のが……精いっぱいの対応です。
上村　そう思うかあ？　おかしいんじゃねえ？　しかも挨拶にくる？　お前に？　相手もおかしいんじゃねえか？　なんでお前に挨拶……ありえない。
加藤　（小さな声で）とはいえ、向こうさんが来たいと言っていたので。
上村　お前に挨拶？　ありえない！　ありえません！
加藤　……
上村　だいたいさあ、お前、携帯持っているんじゃねえのか？　なぜ、ここの電話で電話をかけた？
加藤　（小さな声で）この部屋に居るので……ここの電話を使っただけです。
上村　ん？
加藤　……
上村　はい。わかりました。今日からこの電話はお前の電話ではなくなりました。
加藤　（小さな声で）何でですか？
上村　何で？　え？　わからない？
加藤　（消えそうな声）……はい。
上村　お前は自分の携帯をもっている。だからここの電話を使う必要はない！
加藤　自分の携帯はプライベートの携帯ですから……
上村　あのなあ、この電話は研究室の電話だよ？　お前が使う権利はないんだよ！
加藤　……
上村　俺はお前の上司！　俺がこの電話は使えないと言ったら使えない！　これがルールだよ！
加藤　……

加藤、上村を睨みつける。

上村　あなたは何部に所属しているのですか？
加藤　（小さな声で）研究開発部です。
上村　はあ？　声が小さい！
加藤　研究開発部です！
上村　だよなあ。
加藤　……
上村　で、上司は誰だ？
加藤　……
上村　誰だ？　上司は？
加藤　本坂さんです……
上村　はあ？　本坂？　もう一度言ってみろ！
加藤　この間も言いましたが……本坂さんです！
上村　あのなあ……この研究室に居るのは俺とお前……年配の人が上司なんだよ！
加藤　上司は本坂次長です……
上村　わかってないなあ……何度も言うぞ！　本坂は月に1回だけここにいるやつだろ……そんなやつが上司か？　毎日居るやつ……指示を的確に出せるやつが上司だろ！　本坂はそんな指示だせるやつか？
加藤　……
上村　わかるか？　それが俺なんだよ！　社長も言っている……上村さん、あなたは死ぬまでやってもらわないといけない。あなたの技術はすばらしい……

この会社で持っていない技術を持っている人物だ……あなたがNo．1だ……
これからもよろしくお願いしますと……社長が俺に言ってくれたんだよ……
No．1ということは……俺は社長以上なんだよ！

加藤　……

上村　わかったよな。俺の言うことを聞け！

加藤　……

上村　わかってんのか！　おい！　何か言えよ！　お前は俺のすごさをわかっていない。

加藤　……そんなことないですよ。尊敬しています。すごいです。

上村　なんだ？　その言い方！

加藤　本当です！

上村　はあ？

加藤　……

上村　お前はバカにしてるんだ！　俺のこと！

加藤、沈黙

上村　この間……社長に「死ぬまで一生この会社にいてください」と言われたよなあ？

加藤　……

上村　お前は喜んでいた……何だあの態度？　もう一度言うぞ！　俺の専売特許だ！

加藤　あれは……

上村　なんだ？

加藤　社長賞を受賞したときのことですか……

上村　お前が何で社長賞なんだ？　お前ごときが……

加藤　でも……

上村　でもじゃない！　社長賞を獲るのは俺だ！　毎年獲っていたのに……何でお前なんだ！　この部屋の壁に飾る賞状は全部俺じゃなきゃダメなんだよ！

上村、飾っている賞状を指さす

加藤　……

上村　聞こえていますか？

加藤　……

上村　わかっていますか？

加藤　……

上村　生きていますか？

加藤　……

上村　おい！

加藤　……

上村　おい！

上村、笑いながら

上村　お前は俺にとって迷惑なんだよ！　お荷物なんだよ！

加藤　……

上村　そうだ！

加藤　……

上村　お前は……

加藤　……

上村　ゴミだ！

加藤　……

上村　おい！　ゴミ！

加藤　……

上村　動かないね……ゴミ……

加藤　……

上村　ここにあっても邪魔になるね。じゃあ……

上村が加藤を引っ張り、加藤は抵抗する。

お互い大声になる。

加藤　何をするんですか？
上村　何もしゃべらない、動かない、だからゴミだと思ったんだろ！　おい！　こっちに来い！
加藤　やめてください！
上村　誰に向かって言っている！
加藤　嫌です！　やめろ！
上村　もう一回いってみろ！
加藤　あなたに向かっていってんだ！　嫌だ！　ふざけんな！　嫌なものは嫌なんだよ！　本当のことを言っただけだ！
上村　ゴミ！
加藤　ゴミじゃない！
上村　ゴミだ！
加藤　ゴミじゃない！　あんたがゴミだ！
上村　なんだと？　もう一回言ってみろ！
加藤　あんたがゴミだ！
上村　誰に向かって言っている？　ゴミが俺様に対して口ごたえした！

上村、気が狂ったように怒り始める。机からゴミ袋を取り出す。そのゴミ袋を加藤の頭にかぶせようとする。加藤は抵抗し、上村を突く。上村、後ろに倒れる。

上村　痛い！
加藤　……
上村　痛いよ！

上村、立ち上がり、机の書類をばらまき始める。

上村　ゴミにやられた！　ゴミが俺に抵抗した！　俺の体は痛い、痛いって言ってる！　どうしてくれるんだ！　この痛み！

上村、机の上に鳥の剥製を壊す。鳥が壊れる。

上村　ああ……
加藤　……
上村　ああ……

上村、壊れた鳥の剥製を拾い上げ、見つめる。

上村　壊れちゃった。かわいそうに……かわいそうに……俺の大切なタビダチ……

上村、加藤を見て、手から力が抜け、壊れた鳥の剥製を落とす。

上村　ねえ……責任とってもらえるかな？　俺のタビダチに……
加藤　……
上村　責任とれよ！
加藤　……
上村　おい……
加藤　……
上村　今……
加藤　……
上村　俺の大切なタビダチを……
加藤　……
上村　殺したんだ！
加藤　……
上村　このゴミが！
加藤　……

上村　殺したんだ！
加藤　……
上村　おい！　質問に答えろ！

上村、鳥の剥製を拾い、加藤に投げる。

加藤　殺していません！
上村　はあ？
加藤　殺していません！
上村　今ここでタビダチが！
加藤　あなたが……勝手に投げて……壊れたんでしょ！
上村　なんだ！　その言い方は！
加藤　ゴミ、ゴミ、僕はゴミではありません！
上村　これから後悔する！　ずっと後悔する！　棺桶の中で思えば良い。くそって。
加藤　……
上村　くそって言っても俺には届かないんだけどな。もしかして、今の録音テープに録ってないだろうなあ？　良いんだよ。録音テープに録っても。どうせ録れないけどなあ。もうお前には。そんなこともできなくなる。
加藤　……
上村　まず、社長に感謝の言葉を言え！
加藤　……
上村　この間、社長から加藤君を撫でてあげてくださいさって、言っていたよ。良い社長だよ。お前のことを一生懸命思ってくれている……よかったなあ。本当によかったなあ。モノとして見てもらえて本当によかったなあ。
加藤　……
上村　おい！　感謝の言葉を言え！
加藤　……
上村　おい！
加藤　……
上村　何かしゃべろ！

上村、工具箱で加藤を殴る。
加藤、倒れる。
工具箱から工具が出る。工具が散乱する。
殴ったことによって工具が壊れている。
上村、無表情で

上村　ゴミなのに……倒れちゃった……
加藤　……
上村　ゴミなのに……生きている……
加藤　……
上村　ゴミなのに……
加藤　……

加藤、泣いている

上村　この工具壊したの、お前だろ？
加藤　……
上村　お前だろ？
加藤　……
上村　おい！
加藤　壊してません！
上村　はあ？
加藤　……
上村　今見たよな？　お前が壊したんだよ！
加藤　壊してません！
上村　壊した！

加藤、睨みつける

上村　謝れ！　謝れ！　ここで。
加藤　……

上村、加藤の前に立つ。

上村　はい。決めました！　これからお前にはこの会社のものを使わせません。
加藤　すみません……ここの試験室のものを使わせていただけないと仕事ができません。使わせてください。
上村　はあ？
加藤　……。
上村　使いたいか？
加藤　はい……
上村　じゃあ、使わせてやる。お前の給与から機器を買うなら……
加藤　やめてください。それは。
上村　会社から借金してんだよなあ。３０００万円。両親の借金を会社から借りる……
加藤　……。

上村、笑う。

上村　社長はすごいよなあ。何も能力のないやつにお金を貸す。すごいねえ。お前は気の毒なやつだ。いつでもどこでも災難がやってくる。大変だね……でも、大丈夫じゃないか。お前がこの世から居なくなれば、保険金が下りるじゃないか。そうしたらそこからみんな家族が生活できる……これから買う機器、今のお前の給与じゃ、払えないからなあ。保険金から払わせてもらうよ。
加藤　やめてください。保険金って。まだ私は死にたくありません。

上村、笑う

加藤　死にたくないんです！
上村　感情が残っているんだね。人間としての……
加藤　……
上村　人形にならなきゃ……ペットにならなきゃ……ゴミにならなきゃあ……ねえ。
加藤　……
上村　おい！
加藤　……
上村　ゴミ！
加藤　……

加藤、泣きながら睨みつける。
上村、笑う

上村　辛いかい？　おい、ゴミ！
加藤　……
上村　お前、犬になれ！　犬に！
加藤　……
上村　さあ、何を使いたい？
加藤　……
上村　クリーンルームか？　エタノールか？　硫酸か？　塩酸か？
加藤　……
上村　今言っただけでも１０００万円ぐらいだよなあ。
加藤　申し訳ございません。
上村　はあ？　犬なのに、何を謝っているんだ？　何を怖がっているんだ？　お金か？　死ぬことか？
加藤　本当に申し訳ございません。
上村　一生謝ればいい。家族に、そして、友達に。そうだなあ、もっと謝らないといけないのは……社長に、そして、この俺に……

加藤、上村の顔をじっと睨みつける。

上村　さらに謝らないといけないことがあるんじゃないのか？

上村、笑う

上村　お前、労基署に行ったんだろう？　パワハラだと……

加藤　行ってません。

上村　調べはついてんだ！

加藤、顔をしかめ、固まる。

加藤　私は……

上村　お前なあ、顔が行ったと言ってるよ。

上村、笑いながら

上村　正直に言えよ。

加藤　……

上村　情報はすべて俺のところに集まってくる。お前がどこで何をしゃべっても、誰と会っているかも……家族とどんな話をしているのかも……わかっているんだぞ。

上村、笑う

上村　先週の日曜日、家族と買い物に行ったよな？　お昼ご飯を食べた。そこで会社の話をした。

加藤、おびえる

上村　ご飯が進まないお前は嫁に心配され、嫁が労基署行ったら？　いっしょに行こうよ……あなたの命が大切なんだから……と言われたよな？

加藤、何も言えないまま、茫然とする。

上村　で、一緒に労基署へ……お前だな、家族になぜ心配かける？

上村、さらに笑う

上村　……わかったろ？　俺のところにはお前が何をしたか、何をしゃべったか、すべてつつぬけなんだよ。

加藤、さらにおびえる

上村　みんな敵なんだ。この話はお前の身内から聞いたのかもしれないぞ、店の店員が言ってきたのかもしれないぞ、すべての人から情報が入ってくる……

加藤叫ぶ、おびえる声。

上村　わかっておけ！　すべての行動が俺のところに入ってくる。昨日、どこで誰としゃべってたのか……誰と会っていたのか……行動一つ一つが俺の耳にすべて入ってくる……お前は逃げられない。もう逃げられないんだよ。

上村、笑う。

加藤、おびえる。

上村　そりゃあ、驚くだろうね、おびえるだろうね。怖いかい？

加藤、歩けない状況、椅子に座ったまま。

上村　働きたいかい？　そうだよな？　そうだよな？　借金返済のため……生きなきゃあねえ……
加藤　……
上村　ほら、ここにメモがある。

上村、労基署からのメモを読む。

上村　労基署からだよ……同僚から死ねと言われた……ん？　俺、そんなこと言ったか？　死ねなんていってないよ。他にも、作った試作品を同僚が壊したり、研究室のものを使わせなかったり、とある。いつ、どこで、誰が壊したんだ？　そんなことはないよなあ。お前？
加藤　……
上村　研究室のものを使わせない？　だってお前実験してるじゃん。仕事してるじゃん。
加藤　……
上村　誰が壊した？　おい、俺か？　これはパワハラなの？　ねえ？　キミは妄想癖があるんじゃないのか？
加藤　パワハラです！
上村　パワハラねえ。パワハラ？　そう、パワハラ。パワハラかあ……では、パワハラの意味を教えてくれる？
加藤　……
上村　わかんないだったらいうなよ！　答えられないならいうなよ！
加藤　……
上村　じゃあ、教えてあげるよ。味あわせてやろう。お前の心に刻みこんでやる！

上村、笑う

上村　わからないなら身をもってわかればいい……
加藤　……
上村　おい！
加藤　……

上村、怒る

上村　返事ぐらいしろよ！

上村、加藤の胸倉をつかみ、

上村　おい、わかってんのか？　俺に抵抗はできないんだよ。
加藤　……
上村　おい！
加藤　終わる……終わる……終わる……
上村　どうした？　何か言ったか？
加藤　終わる……

上村、笑う

上村　お前の存在がムカつく。お前なんか消えろ。
加藤　……
上村　消えろ！

加藤、沈黙、顔を睨みつける。

上村　なんだ、その顔は？

加藤、ずっと顔を睨めつけたまま。

上村　聞こえてないか？　もう一度言う。お前の存在がムカつく。お前なんか消

えろ。いいか。まず、ここにあるお前の荷物をすべて出せ。
加藤　……
加藤、動かないまま。
上村　言ってることわからないか？　お前の存在、お前の荷物、すべて消えろ。すぐやれ！　命令だ。
上村、動かない加藤を立たせて引っ張る。
上村　良いからやれよ。
加藤　終わる。
上村　終わる？　そう、終わるんだ。終わっていくんだ。
加藤　……
上村　そこにある段ボール。とれ！　はやく、そこの段ボール！　動け、犬！（大きな声で）はい、ガムテープ取って。段ボールを箱にする！
加藤　……
上村　おい！　犬！
加藤　……
上村　動きが悪い！
加藤　……
上村　ん？　犬！　まだ俺に反抗してんのか？
加藤　僕は加藤雄介です！
上村　（笑いながら）わかった、わかった。
加藤　何がわかったんですか！
上村　うるさいなあ！
加藤　……。
上村　犬らしくないなあ……
上村、机から手錠、首輪、リードを取り出し、加藤につける。嫌がる加藤。
上村　ぴったりだ！　俺の予想通りだ！　首のサイズ！　合わないかと思っていたが……
加藤　何をするんですか……
上村　ん？　わかんない？　お前は人間の心がまだ残っているんだよ……
加藤　……
上村　犬なのに！
加藤、嫌がる
加藤　……
上村　何を止まっている。動きが悪い！
上村、加藤に近寄りガムテープを持たせて、背後から箱を無理やり作らせる
加藤　やりたくない！
上村　おら、やれ！
加藤、動けず
上村　やれ！　遅い！　一緒に箱に入れてやるよ。
上村、加藤の背後から箱に投げ入れる。
上村　この研究室にあるもの、すべて消せ。早く。（箱に入れる作業、笑いながら）終わるんだ。一緒に終わらせるんだ。お前が終わっていくのを俺は手伝うんだ。

加藤、立ち止まったまま。
上村が加藤を気づかせるように棚のあるところまで引っ張る。
上村　おい、お前だろ！　金庫から金盗んだの？
上村、手提げの金庫をもってカギをあける。
上村　昨日な、15万6000円あったんだよ。今日調べたら、1万円ないんだよ。取っただろ？
加藤　とってません！
上村　お前しかいないじゃないか。だいたいな、この研究室には俺とお前しかいない。いったい誰がとるんだよ。
加藤　とってません。
上村　とった！
上村、金庫のお金を取り出し枚数を数える。
上村　一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、……十枚、十一枚、十二枚、十三枚、十四枚……合わないじゃないか。ここに1万円があるはずなのに……
加藤　とってません。
上村　この金庫の鍵は俺とお前しか知らない場所にあるんだ！
加藤　……
上村　お前なあ、俺がとった、とでもいうのか？　お前だろ？　もういい！　これを社長に報告する。警察に連絡する。窃盗だ。会社の金を盗みやがって。
加藤　とってません。
上村　お前は犯罪者だ。お前は罪を償わないといけない。刑務所に入って罪を償わないといけない。
加藤　……
上村　金庫から金を盗んだ窃盗罪、会社のモノを壊した器物破損罪、そして俺に対して侮辱した侮辱罪……侮辱、これは重いぞ……懲役十年……いや、二十年か……日本ではなあ。刑が軽いよなあ。
上村、笑いながら
上村　お前なあ、刑務所から出てきても、俺が行動を見張ってる。一生落ち着いた場所はないんだよ。
加藤、おびえる
上村　これは消えるしかない、死ぬしかない、死だ……お前を終わらせる。終わるんだ。
上村、紙を取り出す。
上村　今ここで書け。旅立ちの言葉。
上村、ペンと紙を出す。
上村　……旅立ちの言葉。何もたもたしているんだよ。
加藤　旅立ちの言葉……
上村　お前、空気読めねえなあ？　わからんか？　だからお前はクズなんだよ！
加藤　……
上村　旅立ちの言葉。つまり、遺書だよ。死ぬ前は遺書を書くだろう。遺書と書いてしまうと、会社や俺たちが責任をとらなければならない。まずいよなあ。お！　遺書って書かなければいいじゃんと。考えた。死ぬ、旅立つ、旅立ち、ああ、旅立ちの言葉。良いじゃん。俺ってセンスあるなあ……良いじゃない、このフレーズ。私は今旅立ちます。社葬で流してやるよ。歌謡曲。
加藤、おびえる

上村　なあ、わかるか？　お前なあ、俺に仕事が来ないのはお前がいるからなんだよ？　だいたい、仕事がなんでお前のところばかりにいく？
加藤　……
上村　消えろ。消えろ。世の中から消えろ。生きていて申し訳ないと思わないか？　お前なんか。クズなんだ、人間のクズなんだ。クズはゴミ箱と一緒に捨てられたらいいんだ？　だから、俺が処理してやるんだ、処理してあげるんだ。ありがたいと思え！
加藤　……
上村　世の中にいるクズ、いなくてもいいやつ、処分できない、処理できない、困っているよなあ、全世界に。これは発明だよ。特許だよ。人を処理してあげることのできる方法って、しかもゆっくりと追い詰めることができる……
加藤　……
上村　ここで俺はこの発明を実践する！
加藤　……
上村　よく覚えとけ！　覚えとけと言ってもお前はもうすぐ最期の土を見るだけなんだけどな。
加藤　最期の土？
上村　そう、ほら、高いビルから飛び降りて、最期に見る土の事。なあ……よかったなあ。処分されて。
加藤　嫌です！
上村　まあ、よく聞け！

加藤、立ち上がろうとする。
上村、椅子にとどまらせ、耳打ちしながら

上村　パワハラ、ブラック企業、過労死で自殺……会社の責任だとか……はあ、ちゃんちゃらおかしい。お前らが悪いんだろ、精神的に弱いやつが……家庭で過保護に育てられた。何かあったらすぐ負けました、良いか！　戦争時代ではそんなことなかったんだ。生きるか死ぬか、そんなことパワハラなんて全くなかった。これは戦いだ。人は言う、戦いは反対だと。そうかね。そう思うかね。みんな仲良し。みんな平和を願う、祈る。ただ、歴史は繰り返す。なぜだ？　みんな勝者になりたがっているからださ。誰だって勝者がいいさ。世の中には勝者と敗者の2択がいる。勝者が沢山いればバランスが崩れてしまい、世の中は崩壊してしまう。だから敗者がいる。俺は勝者。お前は敗者だ。敗者になったのだ、敗者は俺の中では死だ。
加藤　……
上村　なあ、死へ向かって旅立ちの言葉を書け。最期の言葉なんだ。産んでくれたご両親に向けて、感謝の言葉を書かないか？
加藤　……
上村　さようなら！　さようなら！　さようなら！　加藤君。ＳＮＳに書いてあげる。会社のお金を盗んだことを書いてあげる……旅立ちの言葉と一緒に……さようなら。さようなら。本当にさようなら。（大声で）本当にさようなら！
加藤　……
上村　さあ！　書けって言ってるんだよ！

上村、加藤の耳元でささやく

上村　座れ。（髪の毛をつかむ）その右手で書けよ。まず、旅立ちの言葉って……どうした？　書けよ？

上村、加藤の髪の毛を引っ張る。加藤、嫌がる。

上村　ほら、どうした？

加藤、泣きそうになる。

上村　泣いてもわからんぞ（笑う）。
加藤　終わる。

上村、笑う

上村　何言ってんの？

加藤　終わる。

加藤、泣く

上村、首輪を引っ張り

上村　よかったなあ、犬！　最期に犬になれて。なれたよ。やっと犬に。

加藤　……

上村　早く書けよ。俺が書こうか？　そんなに書けないなら。

上村、ペンを持ち、

上村　旅立ちの言葉。さようなら、さようなら、さようなら。みなさん、ありがとう。今日旅立ちます。うーん、違うな。（違う紙を取りに行く）旅立ちの言葉。お父さん、お母さん、先立つ不幸をお許しください。私は会社のお金を盗んでしまいました。私は上村さんを侮辱しました。上村さんに申し訳ないことをしていました。

加藤、その紙を奪って、破り捨てる。泣きそうになる。

上村　なんだ？　どうした？　お前は犯罪者なんだ！　お前はクズなんだ。ゴミなんだ！

加藤　違う！

加藤、泣き崩れる。

加藤　生きたいんだ。ずっとクズでも、ゴミでも。

上村　いや、違う。お前は人間じゃないんだ。ゴミ以下、クズ以下だ。

加藤　違います！　ちゃんと生きたい！　幸せになりたい。笑いたい、泣きたい、悲しみたい、喜びたい、友達やみんなと……

上村　お前の生きたい気持ちなんてその程度かあ。残念だなあ。いいやつだったのに……さようなら。加藤君。

加藤、項垂れる

上村　俺はずっとキミのことを考えてる。

加藤　……

上村　死ねばいいのに。

加藤、おびえる。

上村、微笑む。

上村　今作っている薬。これはね。触ってみるか？

加藤、首を横に振る

上村　これはキミを殺すための薬だよ。（本を出す）この合成式。習わなかったかい？　大学での免疫学で。わかるかな？　ならったろ？　わからないか？　アセチルコリンがだな、神経伝達物質を阻害するんだよ。首を吊ったり、ナイフでついたり、大水にさらされたり、雷で撃たれたり、そんな死に方よりね……一息でいける……平和な死に方だと思わないかい？

上村、ノートを出す。一枚、一枚、破り始める。そして、雄介に見せる。「死」の文字。

上村　死ね、死ね、死ね、死ね、死ね、って、ほら？　これ誰のことを言っているか、わかるかい？

加藤　……

上村　一生懸命書いてる。ずっとキミのこと。キミがこの世から消えればいいのに。消えればいいのにと、つぶやきながら書いてる。そして叶う。これは俺の想い……わかるか？　この想い。いなくなれば俺の居場所はずっとここ。家を改築し、車も新車を買い、俺にはお金が必要。キミはいなくなる。

加藤　……

上村　うらやましいだろう。このノート。ほら、書けよ。俺の名前。ここで。そうするとお前は助かるんだよ？　書けよ。書けよ。書けよ。ほら。

加藤、ペンを取ろうとするが、あきらめる

上村　そうだよな。人間の心が残っているんだもん。書けないよなあ。

上村、笑いながら

上村　もうあきらめろ。書こう、旅立ちの言葉。今すぐここで……

加藤、拒否する。

上村　オヤジに言われたことを思い出す……人は一人でいきていき、1人で死んでいくよりほかに道はないだなんて……そんな死に方なんて、さみしくてしょうがない。ここで起こること……世の中で起こることなんて、自然現象じゃないんだ。一から十まで人間の行為なんだ。わかるかい？　時は残酷なんだ。何万回も月が登れば、どんなことでもはるか遠くへと、遠のいてしまう。お前が居なくなることなんてちっぽけなことでしかならない。だから、五分後に死ぬと決まっていたら、今、何をすべきか。そう、ここで旅立ちの言葉を書く！

上村、加藤の頭を撫で始める。

加藤、怖がる。おびえる。

上村　例えば朝がやってくる。刑務所でさあ、死刑を宣告された死刑囚の気持ちがわかるか？　朝ご飯を食べる。刑務官が自分の部屋を通り過ぎたら生きれる、止まったら番号を呼ばれ、最期を迎える。それがキミの終わりの日だ。それは人間ではないのだ。養豚場でえさだけ食べて丸々育ったブタ。そして番号を呼ばれる。ブタはさ、そのまま車で引っ張られるが、人間は一言言わせてもらえる、なんて幸せなんでしょう。そう思わないか？

加藤　……

上村　人は簡単に死ねないんだ、死にたくても、だけどね……俺の方法は簡単に殺すことができる……

加藤　（泣きながら）ずっとクズでも、ゴミでも……生きたい！

上村　いや、違う。お前は人間じゃないんだ。ゴミ以下、クズ以下だ。

加藤　違います！　ちゃんと生きたい！　幸せになりたい。笑いたい、泣きたい、悲しみたい、喜びたい、友達やみんなと……

上村　お前の生きたい気持ちなんてその程度かあ。残念だなあ。

加藤　……

上村　だからね、聞いてあげてる。最期の言葉を。さあ、いっしょに最期の時を過ごそう……

加藤、嫌がる

上村　死なんてね。いきなり訪れる。はい、これから死にますよって、最期にいう言葉はありますかと聞かれても、わからないよな？　死ぬ前に言えないはなあ？

加藤　……

上村　最期の死に方……心に残らない死に方が幸せだよねえ。みんなに心配されずに死んでいく生き方が最高だよねえ。

加藤、上村を睨む

加藤　僕は何かしましたか？　上村さんに何かしましたか？
上村　やったよ！　俺を侮辱した！　犯罪をした！　タビダチを殺した！
加藤　何も私はやっていません！
上村　やった！

加藤、首をふる

上村　お前はもう死ぬことがわかっている、それを俺は聞いてあげている。何不自由なくあの世にいける。
加藤　嫌です！　生きたい！

上村、笑う。

加藤　嫌だ！
上村　よかったなあ……ほら、待ってる。あの世へ連れていってもらいなよ。なあ、生きるのは辛いよなあ。お前が一生懸命頑張れば、頑張るほど辛くなる。誰もそんなものは望んでいないんだ。誰が望む？　お前を心配するようなやつ？　ずっと苦しみながら生きていくなんてつらいよね。最期の晩餐もしたかったね。友達と話をしたかったね。もう何もできないんだよ。お前は明日には居ない。この世から消えてしまう……
加藤　……
上村　研究服を着る。そうすれば俺は変わる。服がそうするのであって、俺がしているわけではないんだ。いつの間にか上村という人格は消え去り、わかるだろう……毎日、この感覚、このぬくもり、これがなくなる苦しみ。ずっと味わっていたいんだ。エタノールの匂い、センサーの音、しみこんでる。俺の人格は奪われる。俺は加害者ではなく、むしろ俺も被害者なんだ。誰にも止めることができないんだ。
加藤　……
上村　怨めばいい。怨めばいい。あの世で怨めばいい。あの世で怨んでも俺には届かない。だってあの世と現世は繋がっていないんだよ。後悔するから書け。生きている最期の言葉なんだ。
加藤　……
上村　さあ、書こう。いっしょに。旅立ちの言葉。
加藤　……
上村　どうした？　最期なんだよ。
加藤　……
上村　そうか。書かないか。旅立ちの言葉。最期の言葉なんだ。産んでくれたご両親に向けて、感謝の言葉をかかないか？
加藤　……
上村　わかった。書かないのか。
加藤　……
上村　残念だね、最期がやってきたよ。さあ、行こう。

加藤、抵抗する。

上村　抵抗しても無駄だよ。この紐がだんだんと窓に自動的に引っ張られる。もう、決まったんだよ、死ぬことが。

加藤、必死に抵抗する。

上村　さあ、おいで。こっちに。こちらの世界においで。お前は死刑囚と同じなんだ。

上村、加藤の首のリードを引っ張る。
抵抗する加藤。上村、笑う

上村　来るんだ！　こちらに来るんだ。

上村、加藤を引っ張り抱きしめる。

上村　やっときたね……おかえりなさい……ほんと温かい……生きていたんだね……待ってたよ……

加藤　……

上村　タビダチ……キミの声がやっと聞こえたよ……蘇ったんだね……

加藤　蘇った？

上村　タビダチ……

上村、強く抱きしめる。

上村　さあ……飛ぶんだ！　最期のコトバを叫ぶんだ！

上村、加藤を窓から笑いながら落とす。

どーん……鈍い音。

上村、研究室の中を鳥のようにしばらく駆け回る。

上村、引き戸が付いた棚を開ける。鳥の剥製が出てくる。

上村　次はこれで……

上村、微笑む。

上村　ねえ……タビダチ……

上村、鳥の剥製を抱きしめる。

暗転。

【了】